

英語発音の基礎 — おさらい

July 1, 2008

<追補 Nov. 29, 2011>

西田 巖

I.Nishida

(Richmond E.S.)

<はじめに>

発音レッスンの勉強の前に、書籍版の辞書の巻頭には、唇、舌、歯、咽頭などの発声器官による発音の要領が解説されているので一度通読されることをおすすめします。

1. 基礎の基礎 — アルファベット(A,B,C, ...)の正しい読み・発音

ポイントとなる文字： A, C, D, F, L, M, N, O, R, T, U, V, Z

2. 母音の発音

母音は、声門からの呼気の流れが口の中で何の抵抗も受けずに発せられる音である。(すべての母音は有声音である。) 日本語の母音数は、アイウエオの 5 音であるが、英語では、口の開き具合、舌の位置、唇の形などの違いで母音数は 20 になるといわれている。これら 20 の母音をすべて峻別して聞き分け、正しく発音するのは極めて難しい。

ただ、下記の母音の発音はどうしても習得しておきたい。

(1) 前母音 /æ/ — <音源聴取> cat, bad, fan, match, carrier

<音の違いを音源聴取> cut, bud, fun, much, career >

(2) 中母音 /ə/ (schwa : “あいまい” 母音)

<音源聴取> bird, first(vs. fast), firm(vs. farm), girl, term, work, sir

<Note:>

air, eye のような二重母音、royal, flower のような三重母音を持つ語も数多くある。しかし、基本の母音が正しく発音できることがまずは肝要。

3. 子音の発音

子音は声門からの呼気が、口の中で、舌、歯、唇などで抵抗を受けて発せられる音である。子音の分類およびその主な音は下記のとおりである。(なお、子音には、たとえば、p, f, θ のような無声音と、b, v, ð のような有声音がある。) これらの子音は練習しだいで発音は難しくない。ただ、英語では子音

の連続、子音で終わる語が圧倒的に多いのに対し、日本語はすべての語が「ア、イ、ウ、エ、オ」の母音または“ン”で終わる特質がある。このため、英語の子音で終わる語について、ついつい日本語と同じように母音終わりしないように正しい慣れ（特に初学段階では）が必要である。

（注） 有声音は、声帯の振動による音、無声音は声帯の振動を伴わない音である。日本語の清音は無英音に相当する。両手の手のひらを両耳に当てるか、指を軽く声帯にあてて発声した時に震動を感じればその音は有声音である。

(1) 炸裂音

/p/ - pear, pin, post, pipe, map
/b/ - bird, bad, boy, ebb, verb
/t/ - tea, ten, time, teacher, matter
/d/ - day, dog, desk, god, sudden
/k/ - king, kill, speak, book, book
/g/ - good, gate, dog, egg, ghost

(2) 摩擦音

/f/ - fan, fox, off, knife, safe
/v/ - very (vs. berry, bury), voice, five, love, violin, vest (vs. best)
/θ/ - three, think (vs. sink), thumb (vs. sum), bath (vs. buss)
/ð/ - this (vs. JIS), that (vs. ZAT), the (vs. ZA), there, then, with
/s/ - sea, sun, since, gas
/z/ - zoo, zinc, goes, does
/ʒ/ - usual, leisure, judge, measure
/ʃ/ - she (vs. see, sea), ship, sure, fish, share
/l/, /r/ - (後述、l, r の区別参照)
/w/ - wit, watch, word, work, way

(3) 鼻音

/m/ - arm, man, me, moon, palm,
/n/ - name, night, now, noon, navy
/ŋ/ - king, sing, pink, long, wrong

<Note:>

- ①摩擦音のうち、/f/, /v/, /θ/, /ð/ は、日本語にはまったくない子音であるが、英語では普通の音である。慣れれば難しくないので、英語の習いはじめで正しく発音できるようにしておきたい。
- ②cheap の/tʃ/, joy の/dʒ/ などの重子音の単語は数多い。例えば、/dz/音 (cards, hands, reads) は我々にとって/z/と同じ発音になってしまって正確な発音が難しい。

<補>

英語は他の印欧語にくらべ文法が簡潔になった反面、綴りと発音が異なる語が非常に多い。また、英語の歴史から見て、他の外国語からの借用語が多く、英語流でなく元の外国語で発音する語も少なくない。しがたって、単語を辞書で調べる時、必ず発音、アクセント位置を見ることを習慣としたい。

英語教育が重要と言われながらも、中学の外国語（英語のこと）学習指導要領では、表音記号〈発音記号〉は「教えることもできる。」と書かれている。「～することもできる」という役人用語の解釈は「しなくてもよい」→「しない」と同義であり、事実、ほとんどの公立中学では発音記号の読みは教えられていない。

英語の初学段階で、発音記号の読みを習わずして、どうして、その後学ぶ多くの単語を正しく発音できるようになるのであろうか、いささか心配である。

〈発音記号を見る必要のある単語例〉

anger/danger, climb, enough, gnaw, hero, heard, heir, knife, parliament, vehicle, sew, suit, sword, spread, taught, tomb, 20th, bow(おじぎ)/bow(弓), lead(鉛)/lead(リードする), row(口論)/row(列), depot

〈フランス語読みする語〉

corps, coup d'etat, debris, en route, ensemble, grand prix, esprit, rapport, rendezvous bouquet

3.1 L の発音、R の発音

日本人英語の発音で、L 音、R 音の区別が不得手なのを強調して日本人の英語の発音はダメとするむきがある。たしかに、英語で L 音、R 音の違いは大事であるが、これにあまりにこだわるよりも、上記の母音、子音の各音の発音をマスターしておくことがより大事である。

L 音、R 音の発音は、難しく考えずに次の要領で慣れれば充分である。

(1) L の発音

五十音のら行、“ら”、“り”、“る”、“れ”、“ろ”を、舌の先端を上歯の後の歯茎(upper gum)につけて発音する。(la, li, lu, le, lo)

(2) R の発音

上記、“ら”、“り”、“る”、“れ”、“ろ”を、舌の先端は上歯茎につけず、舌の先をやや丸め口の奥の方に引き付けながら発音する。(ra, ri, ru, re, ro)

(「ラーメン」、「リング」、「ルート」、「レンガ」、「ローマ」を巻舌の要領(yo-u-ryou)で練習(ren'shu))

〈練習用〉

late/rate, lay/ray, low/row(roe), light/right, lead/read, lace/race, lead (鉛) /red, leaf/reef, load/road, flee/free, lock/rock, loot/root, clash/crush, collect/correct, flame/frame, glass/grass, play/pray, clown/crown

語の頭の L,R 音は練習でカバーできるが、語の綴りの中にあるとき、また、L,R の綴りが混在する場合、発音はたしかに難しい。

(relation, release, relevant, Colorado, liberal, Hillary さん、Ireland, umbrella, etc)

4. イントネーション

一つ一つの単語の正しい発音、アクセント位置も大切であるが、本来、コミュニケーションは、話者と聴者の間で「連続する語のやりとり」で成り立っている。(勿論、語以外にも、話者、聴者の両者の目線、顔つき、ジェスチャーなどもコミュニケーション成立の重要な要素。)

会話時で、話者は伝えようとする意図、感情によっておのずと語調の強弱や抑揚、リズムの違い、流れの勢いで語と次の語の連結（リエゾン）または消音などを伴って発話している。これが「イントネーション」である。

単語レベルの発音は正しくとも、話としての流れに感情の起伏がなく平板な「イントネーション」であれば、あたかもロボットと話しているようでとても人間同士のコミュニケーションはいえない。国際会議やビジネスでの実場面で、非英米人である中国人、インド・パキスタンなど南西アジアの人々、また、ヨーロッパでもイタリア人、フランス人の人たちがかなりクセのある発音で立派にコミュニケーションしているのを目にするが、これは、彼らの会話が、英語シンタックスの共通文法の上で、話の「イントネーション」の波長が合っているからではないか。

4.1 イントネーションの学習法

我々が日本の小説や物語を声にだして読めば自然に場面に応じた語調や抑揚が伴う。これは日本語の文法、文構造をすでに無意識に体得しておりかつ個々の単語の意味を知っているからである。

同じように、英語についても、まずは単語の意味を理解し、英語の文構造・文法が身につくほど（世間でいう「英語脳」になるほど）自然な英語発想の「イントネーション」で発話できるようになる。

(1) 語彙の増強

まずは単語の語彙力が必要。その方法は、

- ・ 自分の仕事や、趣味、関心のある分野の語彙は意識して覚えていく
- ・ 必要な語については、類語、反語もついでに調べる
- ・ 語のコロケーション（語と語の連結・共起関係）に関心を持ち口癖的に覚える

イディオム、at, by, in, on などの慣用前置詞句、動詞と不定詞／動名詞の目的語

- ・ 会話で潤滑油的な働きをする「出だし語」、「つなぎ語」、「間合い語」の語彙も増やし、自然なタイミングで使えるようになれば申し分なし。

(2) 英語シンタックス・マインドの習得

四六時中英語に晒される理想的な環境に居ない我々学習者にとっては、ラジオ・TV 語学講座、映画、インターネットなどで生の英語にできるだけ接するよう心がけて耳の訓練が望まれる。

しかし、現実には、時間が合わない、自分に関心のある内容の番組が見つからない、などで相当に本腰を入れて取組まない限り長続きしない。したがって、普段の勉強は、新聞、雑誌、ペーパーブックなどの印刷物を見てのマイ・ペースでの「読み」が中心となる。長続きするためには、自分の好きなもの、関心のあるテーマなどに沿った内容のものをなるべく多く、量を読むことである。(最初の段階では、単語の意味をいちいち辞書で調べるのが面倒で苦痛である。しかし、ある一定量のボキャブラリがついてくるとパッと視界が開けたように楽になる。逆に、知らない単語に出会ったときは積極的

にいろいろな辞書に当たって調べたくなるものである。)

英文は、日本文とちがって、語と次の語との間に必ずスペースがあり「分かち書き」になっている。したがって、「読み」に慣れてくれば数語の単語がパッと一度に目に入ってくるようになる。そこで単語の意味を理解している語彙が多ければ多いほど、量を読めば読むほど、英語 5 文型（注 1）による発想マインドの定着が増し、文の意味や文中の重要部分の "thought group" が自然と飲み込めるようになる。文意がわかれば、もしこれを声に出して読めばその内容にあった自然な「イントネーション」になっているはずである。

アポロ 11 号の月面着陸（1969.7.20）の同時通訳、また、NHK の語学番組の講師をされていた国弘正雄氏もその著書の中で「只管（しかんくただひたすらに）百読」と「音読」を強調されている。まったく同感である。とにかく多くの「読み」こなすことで英語シンタックス発想に慣れ頭にしみこませることである。その上で、日・英の文化の違いなどによる日本語にない英語の発想・表現、例えば、無生物主語の文、日本語表現とは違う受動態・能動態の使い分け、付帯的な状況を一文にする with 構文、その他の英語らしいイディオム表現などを習得していけば理想である。

<注 1： 基本 5 文型に義務的副詞句が結合する文型も加え基本 8 文型が合理的と提唱する学者もいる。難しくなく素直に理解できた。－ 安藤貞雄「現代英文法講義」（開拓社）>

<あとがき>

今回、浅学を省みず英語勉強法の私見を記したが、結論は平凡な「語学の勉強に王道はなくコツコツ地道に続けること」ということに帰着する。このコツコツのプロセスを積み重ねていくとある段階からは辞書を引くことが苦痛でなくなりかえっていくつかの辞書を引いてみるのが楽しみとなる。また、時には、文法も掘り下げて勉強してみたいくなる。

「語学」などと大げさに言はず、気楽に「語楽」（ゴガク）をしていると思いたい。ただ「(語)術」の要素が大であるが故、毎日の練習が欠かせないがそのプロセスを「語楽」し、これを通じて得られる「知」の広がりを楽しんで生きたいと思っている。

=以上=